

新聞に親しみ、自分の考えをもち、表現できる児童の育成

都城市立上長飯小学校
教諭 田中美充

1 はじめに

本校は平成24年度、NIE教育実践推進校としての指定を受けた。初年度ということもあり、児童の実態をふまえながら、どのように教育活動に新聞を活用すればよいか、試行錯誤しながらの実践であった。

本校児童（全校児童798人）の実態の一端を紹介すると、授業において、どの教科においても国語辞典を準備・活用し、言葉への関心を高めている。さらに読書に対する興味・関心が高く、平成24年度の図書貸し出し総数は40384冊で一人当たりの貸出冊数がおよそ50冊と、かなりの図書に親しんでいる。

それに対して、4月当初、新聞やニュースに毎日ふれる児童はかなり少なく、高学年の児童についても、前日のニュース記事を聞かれても答えられる児童は限られていた。新聞を定期購読している家庭の割合も多くはないのだが、定期購読をしていても、主にスポーツ欄やテレビ欄、さらには写真や4コマ漫画のみ目を通すぐらいであった。その主な理由としては、わからない漢字や語句が多く記事の内容に興味がない、そもそも社会の出来事に興味がない、といった意見が多かった。



【資料1 新聞コーナー】

2 学校としての取り組み

5月から既読紙の宮崎日日新聞に加え、新たに全国紙を2紙ずつ配達・購読させていただいた。当日配達された新聞は、高学年の廊下に新聞コーナー（資料1）を設置し、国語辞典や漢和辞典、英語辞典といっしょにおいた。

さらに、新聞に目を向けはじめたことにより、これまでも行っていた新聞への投稿が各学級担任の奨励もあり、より積極的になり、特に宮崎日日新聞の「若い目」への投稿と採用がふえ、校長室前の掲示板に多くの記事が貼られた。掲示された児童は、自信と掲載への意欲がさらに高まり何度も挑戦する児童が多くみられた。また、同様に、給食時の放送で自分達の作文や日記を発表する時間が設定されているが、相乗効果とまでは言えないものの、新聞への投稿同様に発表や作品をみんなに見てもらえる、聞いてもらえるという喜びを味わおうとする児童も増えてきた。（資料2）



【資料2 放送による発表】

3 実践の概要

- (1) 新聞に親しむことで、社会の出来事に目を向け、関心をもつ活動
- (2) 新聞記事を活用した社会科授業

4 具体的な取組

- (1) 新聞に親しむことで、社会の出来事に目をかたむけ、関心をもつ活動



【資料3 NEWSクイズ】

ア ニュースタイムの設定

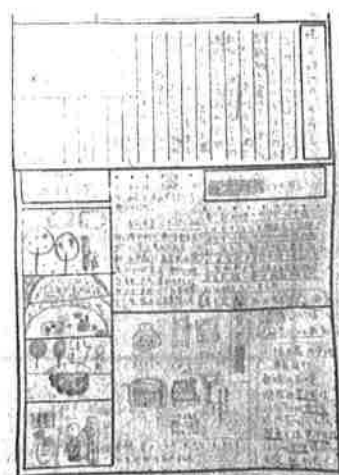
関心の低い社会の出来事に少しでも目をかたむけさせるための手立ての1つとして、朝の活動や社会科の授業の中で、黒板に前日のニュースをクイズ形式で提示した。（資料3）

記事の内容は新聞に準じて板書し、専門用語や漢字もそのまま板書し、分からない言葉や土地名は辞書や地図帳を使って調べさせた。そのような活動を繰り返したことで、児童の意識が社会に向くようになり、学年後半は、政治や出来事に対して自

分の意見を積極的に発言したり、自分の考えをもち、友だちや教師、保護者と討論したりするなど行うようになった。

イ 新聞紙面を参考にした自作新聞制作

第6学年では、初めての深く歴史に出会う。歴史は今も続き、発見&変化している。その発見を新聞は新鮮に伝えてくれる。教科書には掲載されていないホヤホヤの情報が惜しげもなく紹介されている。歴史を学習したばかりの児童は、既習事項に関連した内容を新聞記事の中に見つけると、「先生！〇〇が載ってるよ、見てえ」と得意気な表情で教えてくれる。児童が歴史学習の面白さや魅力に魅せられていくのがよくわかる。児童の中には、新聞記事をスクラップしたり、宅習ノートに貼り付けたりしてくる。そして、その記事をもとに、レイアウトや記事の内容を参考にしながら自分なりの歴史新聞（資料4）を制作することに喜びと楽しさを感じる児童がたくさん出てきた。



【資料4 歴史自作新聞】



【資料5 新聞社の取材】

さらに、児童にとって新聞社の取材を受ける機会（資料5）もあり、歴史に興味をもつと同時に新聞制作にもかなりの興味をもつことができた。その結果、児童は、はじめのうちはたださわり、眺めるだけであつたが、次第に歴史だけでなくいろいろな分野の記事に興味をもち、国語辞典を手に持って新聞を読む児童の姿が当たり前になった。（資料6）



【資料6 新聞に親しむ姿】

(2) 新聞記事を資料に使った授業の実践

新聞記事を活用した授業として、平成24年度はNIE実践初年度ということもあり、社会科を中心に実践することとした。本実践例として、第5学年を取り上げた。

- ア 教科 小学校社会第5学年
- イ 単元名 わたしたちの生活と工業生産－3 工業生産と貿易
- ウ ねらい

我が国の工業生産における貿易が現在抱える問題点について明らかにするとともに、それを解決するための方法について自分なりに考え、判断することができるようにする。

エ 新聞活用のポイント

本授業を実施する時点で、教科書や社会科資料集では十分に説明されていない「2011年3月11日の東日本大震災以後の変化」にスポットを当てて、工業生産と貿易に関する最新の資料のひとつとして新聞記事を用いる。

オ 児童の実態

学年当初は、社会科学学習に対する興味・関心が低かったが、新聞記事の活用や地図帳、インターネットといった教育機器や情報機器を利用することにより関心が高まってきた。

カ 実践内容

- 本時 第5時（指導計画 全6時間）
- 学習指導過程

- ① 前時までの学習をふり返る。
- ② 本時の学習について話し合う。
 - 社会科資料集『日本の貿易額の変化（折れ線グラフ）』を読み解き、予想を立てる。

【学習課題】
我が国の工業生産における貿易が、現在かかえる問題点について考えよう。
- ③ 資料を調べて、問題点を明らかにするとともに、解決する方法も自分なりに考える。
 - 資料を調べてわかったことや考えられることをミニワークシートに書き出す。
 - ペアで内容を確認め合い、必要に応じて書き加えたり、修正したりする。
- ④ 調べてわかったことを全体場で発表する。
 - 【問題点】**
 - 安い外国製品が多く輸入され、国内の工業製品が売れなくなったのではないか。
 - 国内の工業製品が売れなくなると、生産している工場で働く人が減るのではないか。
 - 【解決する方法】**
 - 関税をかける。 ○ 相手の国と話し合う。
 - 【さらに考えられる問題点】**
 - 海外でも安い外国製品との価格競争に負けているのではないか。
- ⑤ 日本の工業生産と貿易に関係する近年の出来事を踏まえて、全体で話し合う。
 - 工業新興国の追い上げ
 - 東日本大震災の影響① →多くの工場が被災 →海外移転の動き
 - 東日本大震災の影響② →原発事故 →原油・LNGの輸入増加
 - まわりの国々との関係 →中国によるレアアースの輸出制限
- ⑥ 本時の学習のまとめをする。
 - 【問題点】**
 - 価格の安い外国製品の輸入や現地生産の増加 → 国内の工業のおとろえ
 - 外国の問題や事件の影響を受けやすい。
 - 【対策】**
 - 新たな技術や魅力のある製品を開発する。（オンリー・ワンを目指す）
 - 世界の国々とのかかわりを工夫する。
- ⑦ 次時の学習への見通しをもつ。

- 留意点
社会科資料集の折れ線グラフ『日本の貿易額の変化』が2009年までしか記録されていないなど、児童が調べ活動に用いる教科書等の資料に最新の情報が登場しないことを逆手に取り、2012年の上半期までの動向を予想させた。

特に「我が国の貿易収支が赤字を記録したこと」や「中国や韓国等の新興国の台頭」といったドラスティックな変化について新聞記事等の最新の資料を通して、具体的な動向を知り、それらに対応し、解決するための方法について自分なりに考え、判断することについて学習した。

○ 授業時の児童の反応

日本の貿易収支は、近年輸出入の差額が接近し、2011年、遂に赤字を記録した。この大きな変化を新聞記事等の資料から読み取り、折れ線グラフに付け加えた児童は驚くとともに、その理由や背景に高い関心をもつに至った。

また、「外国製品は安いだけでなく、品質の点でも日本製品に追いつきつつあること」については、スマートフォンや自動車の世界市場を席卷する韓国と日本の家電メーカーを買収した中国の企業の例を紹介した新聞記事等の資料を提示した。この手だてにより児童は、「我が国の貿易で輸出入の差額がなくなった理由とそれを解決する方法」という学習課題に対して切迫感をもって調べたり、話し合ったりすることができた。

○ 授業をおえて～成果と課題

<成果>

日本の工業生産と貿易を取り巻く昨今の状況は、大きくかつ深刻なものへと変化しつつある。児童が学習に用いる教科書や資料集には、このことが掲載されていない。本単元の目標に述べた「我が国の貿易の特色や役割を工業生産や国民生活と関連付けて考える」、「我が国の工業生産における貿易の様子について調査したりして必要な情報を集め、それらの様子や課題を読み取る」ための学習活動を想定した場合、当該学習において新聞記事等の中から最新の統計を収集し、活用することは必要且つ極めて有効な手だてと感じた。

<課題>

児童の発達段階を考慮すると、新聞記事をそのまま用いることは難しい。見出しとリードに注目させるとともに、関連する画像等のWeb資料を併用することにより、児童にとってわかりやすく、魅力的な資料にアレンジする必要がある。

5 おわりに

ある6年生児童が「家で見ていた新聞と学校で見る新聞は違う感じがする」とつぶやいた。そして、その児童に「どこが違う感じがするの?」と聞くと、「面白いところ」と返ってきた。

なぜ、学校で見る新聞が面白いのか?児童の意見を聞いてみると、1つは、自分の疑問を何とかして「解決したい」と夢中になって新聞を読み、解決できた達成感を味わえるから。もう1つは、新聞コーナーで何気なく新聞を見ていたら、自分にとって興味深いことが偶然載っていて、「何か得した気分」という思いを味わうことができたから、という声が多かった。

さらに児童の声を聞くと、新聞記事を読み、「ビックリした」ことに多く出会えたという。児童の多くが、驚いたら「友だちに話したくなった」という。そのことを友だちに教えたら「一緒に喜んでくれた」のだそうだ。「感動を友だちと共有することで、さらに喜びや感動が大きくなった」。まさにこれが学校で新聞を見る醍醐味、つまりは「面白さ」だと私は考える。

卒業間近の児童に、「昨日のニュースは?」と質問すると、ほとんどの児童が、自分に当ててと元気に挙手する姿を目にすることができた。以上のことから、NIE実践は成功したと言ってもよいのではないだろうか。

各新聞社、販売店の方々、そして関係する多くの方々に感謝の気持ちでいっぱいである。